

井上さんは、黒大豆の生産経験がある農家だけでなく、熱意ある農家と、魅力的な新品種との橋渡しをしたいと考えた。大橋さんは、まさにその一人だ。一四年に新規就農し、レタスなどの野菜や米を生産していたが、「豆類への挑戦は初めて。『ひかり姫』を新聞の記事で知り、作ってみたいと問い合わせたと

しかし、『丹波黒』の収穫時期は『山田錦』の稲刈りと重なっており、労働力確保という次なる壁にぶつかっていた。

そこで井上さんが着目したのが『ひかり姫』だ。兵庫県立農林水産技術総合センターが、『丹波黒』を基に一五年に開発した新品種で、『丹波黒』と比べると、ウィルス性の病気への抵抗性が高く、収量も申し分ない。そして、収穫時期が『山田錦』より早い。「農家に提案するさいは、『丹波黒』の栽培技術を十二分に生かせることを強調した」と井上さん。その結果、営農組合のほか、四軒の農家が手をあげ、約一八七aで生産が始まった。

「『ひかり姫』の収穫は、約一か月に集中します。早朝から収穫し、一株に三〇〇弱あるさやを外す作業はかたきついでです。導入前にそうしたデメリットをTACがしっかりと伝えてくれたので、覚悟ができました」

大橋さんの妻で、共に営農する愛さん(34)が続ける。「JAのみなさんがいっしょに作業してくれて、効率化のための提案や必要な機械の貸し出しなど、すぐに対応してくれました。他の生産者を見学したいという要望にも応えてもらい、すごく勉強になりました」

井上さんらTACをはじめ、JAの寄り添う姿勢は、生産農家のモチベーションアップと、高品質の確保につながった。「TACの提案が、農家の人生を左右するかもしれない。責任を持って、新たな挑戦を支援し、目標の実現まで伴走したい」

そう言う井上さんは、畝の先を行く大橋夫妻を追いかけた。

「JAのみなさんがいっしょに作業してくれて、効率化のための提案や必要な機械の貸し出しなど、すぐに対応してくれました。他の生産者を見学したいという要望にも応えてもらい、すごく勉強になりました」

井上さんらTACをはじめ、JAの寄り添う姿勢は、生産農家のモチベーションアップと、高品質の確保につながった。「TACの提案が、農家の人生を左右するかもしれない。責任を持って、新たな挑戦を支援し、目標の実現まで伴走したい」

「『ひかり姫』の収穫は、約一か月に集中します。早朝から収穫し、一株に三〇〇弱あるさやを外す作業はかたきついでです。導入前にそうしたデメリットをTACがしっかりと伝えてくれたので、覚悟ができました」

大橋さんの妻で、共に営農する愛さん(34)が続ける。「JAのみなさんがいっしょに作業してくれて、効率化のための提案や必要な機械の貸し出しなど、すぐに対応してくれました。他の生産者を見学したいという要望にも応えてもらい、すごく勉強になりました」

井上さんらTACをはじめ、JAの寄り添う姿勢は、生産農家のモチベーションアップと、高品質の確保につながった。「TACの提案が、農家の人生を左右するかもしれない。責任を持って、新たな挑戦を支援し、目標の実現まで伴走したい」

そう言う井上さんは、畝の先を行く大橋夫妻を追いかけた。

農家と同じ場所に立つからできる提案がある

— 兵庫県 JA兵庫みらい

消費の動向や営農環境は、変化しやすい。消費者のニーズや環境変化の兆候を的確につかみ、経営のかじを切ることが農家に求められるが、ときに大きなリスクが伴う。農家が抱える課題を明らかにし、よりよい経営に向けて、共に走り続けるTAC(地域農業の担い手に出向く担当者)の活動取材した。

前田 博史=写真 photo by Hiroshi Maeda JA全農TAC・営農支援課=企画協力

写真右から、JA兵庫みらい営農経済部あぐり創生課課長でTAC管理者の竹内重雄さん。「ひかり姫」生産農家の大橋麻世さん、妻の愛さん、TACを経て、現在は同JA小野営農生活センターで営農相談員を務める井上さん。同JAでは、本店にTAC2人、3地区の営農生活センターに営農相談員計18人を配置し、農家の課題を迅速に共有し、解決に当たる体制だ



このコーナーでは、地域の担い手とTACが“未来の農業”のために取り組む活動を、全国のみなさんに届けます



黄金色に輝く田園地帯を抜けた山あいに、黒エダマメ「ひかり姫」の圃場があった。樹勢よく広がる枝に、鮮やかな黄緑色のさやがたわわに実っている。JA兵庫みらいの営農相談員・井上貴男さんが、さやを観察し、感心して声を漏らす。「やっぱりよかったですわ」その言葉に、「ひかり姫」を生産して三年めの農家・大橋麻世さん(34)の表情が和らぐ。「いいいな作業を心がけてやってきたのでうれしいです」同JA管内での「ひかり姫」の生産は、二〇二一年に始まった。当時TACを務めていた井上さんは、基幹作物である酒米「山田錦」を生産する担い手農家の悩みを知った。「かねてからの日本酒の消費低迷にコロナ禍が追い打ちをかけ、特産の酒米「山田錦」の出荷契約数が大幅に減少しました。農家にとって、酒米の減産分の収入確保が大きな課題でした」農家はけつして手をこまねいていたのではない。同じく特産の黒大豆「丹波黒」の栽培面積を増やし、収入確保をめざした。



“現場主義”を徹底し、生産側と販売側をつなぐ

『ひかり姫』は、生産農家13軒、栽培面積314a、販売数量1万1300kg、販売高730万円(2022年度)の実績を上げ、スーパーなど販売先も拡大している。JA全農兵庫の職員や市場関係者などを講師に招いた講習会をTACが企画・開催。選別作業を行いながら、生産側・販売側の意見のすり合わせと、品質向上につながった。また、秀品・規格外品などの写真を撮影し、他県の事例も参考に「出荷規格表」を作成。生産者が一目で正確に選果できる環境を整えた。

出荷規格表を見ながら、今後の作業について話し合う大橋さんと井上さん。「TACと出会って、技術向上のスピードが上がり、さまざまな人とつながることができた」と大橋さんは言う

JA兵庫みらい

加西市・小野市・三木市の3市が管内。北には中国自動車道、南には山陽自動車道が通り、比較的平坦な平野や丘陵地帯が広がる。温暖な気候の下で、酒造好適米「山田錦」のほか、黒大豆やアスパラガス、キャベツ、ブロッコリー、トマトなどの野菜、ドウやイチジク、イチゴなどの果物が生産されている。

JA兵庫みらいのウェブサイト



消費者に届くまでを想定した出荷環境づくり

『ひかり姫』の出荷にさいし、TACを中心に、市場関係者やJA全農兵庫と繰り返し協議して専用のパッケージ(写真右)を作成した。裏面には、『ひかり姫』のエダマメのゆで方のレシピを記載。店頭で消費者が手に取りやすく、『ひかり姫』本来のおいしさが伝わる工夫で、取扱店の拡大に貢献した。「今後は全国展開に向けてPRし、販路の拡大をめざす」(竹内課長)



『ひかり姫』はエダマメ専用の品種。「始めはみずみずしい味わいでやわらかく、終盤はコクがあってほっこりした食感が楽しめる」と愛さん。さやに病気などによる茶斑が出にくく、販売するうえで有利だ

TACと出会い、広がる視野

イラストはJA全農TAC・営農支援課と地上編集部によるコラボキャラクター「TACマン」
TACについての詳しい情報は、JA全農HPのTAC紹介ページまで
(<https://www.zennoh.or.jp/tac/>)

